

平成艸紙



おりおりの記

若者は内向きか

政策研究大学院大学
アカデミックフェロー

黒川 清

著者のサイト〈www.kiyoshikurokawa.com〉

「留学する学生が減った」という苦言をよく聞く。確かにデータにその傾向はあるが内外留学生統計の分析の内容もいろいろだ。

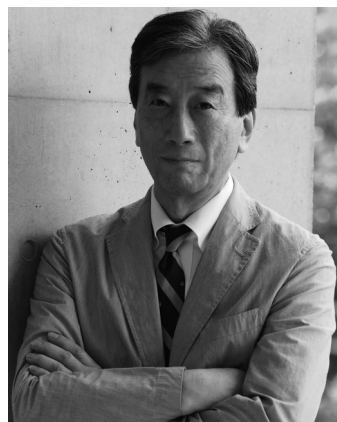
昨今の大学生は学部生で1992-1996年ごろ、大学院生で1990年前後の生まれ。日本の経済成長がピークを過ぎ、土地バブルがはじけ、日本激変の予兆が出始めたころだ。物心つくころから、両親から明るい話を聞いたことがない世代。大銀行の合併が始まり、貸し剥がしがあり、北拓銀行、山一証券などの多くの金融機関が破たんした。親にしてみれば自分たちの職を守るのに精一杯だったろう。今風に言えば「半沢直樹」の時代だ。だから子供たちも保守的になる。

その時代、どんな人たちがどんな留学していたのか。実は大企業や役所からの大学院留学が主だったのではないか？その分が減っているのではないか？しかも、帰国すれば入社、入省の序列に戻るのだ。職場を辞めてまで大学院留学をしたのは女性たちだ。

「世界級・グローバル」のことも起こり始めた。多くの理屈をはねのけてメジャーに行ったのが1995年の「脱藩」野茂だ、「ヒーロー」になる。テレビの力はすごい、何人ものピッチャーがメジャーへ行き始め、数年後にイチロー、松井などが行く。サッカーも同様、ワールドカップにも出るようになる。女性はワールドカップで優勝する。

若者の目標は変わる、できるか、できないかは別として。

90年代までも、今でも、日本からの学部留学生は極めて少ない。この10年、世界の大学の動向は学部教育



へ移行している。世界の変化を予測して、世界のなかの「個人」のネットワークを作らせようとしている。グローバル時代ではここに大きな価値と可能性があるからだ。

大人たちは若者たちに苦言する前に、一人ひとりが若者の支援に何ができるかよく考えよう。中高・大学生時代に「外」の世界で、「個人」としての「実体験」の機会を増やすことだ。ホームステイ、休学、短期留学、海外インターン、NGO活動など、若者たちが広い世界で自分を見つける機会を増やす、これを支援することだ。

「個人」としての「実体験」を通じて、大人たちが考えもつかない活躍をしている若者を何人も知っている。そのような若者たちに活躍の場を広げることだ、企業も、役所も、大学も。できない理由は言わないことだ。